

沈黙する男と発言する女

—ベンジャミン・フランクリンとポリリー・ベイカー—

竹 腰 佳誉子

(2004年10月19日受理)

The Reticent Man VS. The Talkative Woman:
Benjamin Franklin and Polly Baker

Kayoko TAKEGOSHI

E-mail : kayoko@edu.toyama-u.ac.jp

キーワード：ベンジャミン・フランクリン、ポリリー・ベイカー、ピューリタニズム、啓蒙主義、共和制

Key words : Benjamin Franklin, Polly Baker, Puritanism, Enlightenment, republicanism

ベンジャミン・フランクリン (Benjamin Franklin) が1747年に書いたとされている「ポリリー・ベイカーの弁論」(“The Speech of Miss Polly Baker”) は、1747年4月15日にロンドン (London) の日刊紙である『ジェネラル・アドバタイザー』(*The General Advertiser*) に初めて登場する。その内容はおおよそつぎのようなものである。ニューイングランド (New England)、コネチカット (Connecticut) の裁判所法廷において五人の私生児を産んだことで罪に問われているポリリー・ベイカー (Polly Baker) は、自ら行った行為が果たして罪に問われるものであるのか、五人の子供は神の法、自然の法に忠実に従った結果であり、むしろその行為は称えられるべきものではないかと声高々に宣言する。その結果、彼女は罰を受けるのを免れただけでなく、後日その裁判の判事の一人と結婚し、判事との間に15人の子供を儲ける。

ロンドンにおいてこの記事の反響はとても大き

く、数日のうちに少なくとも5つのロンドンの新聞が追隨してこの記事に掲載している。また4月末には、ロンドンの3つの月刊誌がこの記事を掲載している。1747年1年間で合計16誌において記事が掲載されている。植民地での出来事を扱った記事が本国イギリスという土地において何度も取り上げられて様々な人々に読まれ、一つのブームを引き起こすことになった理由は、Max Hallが指摘しているようにポリリー・ベイカーという女性の存在や彼女の行った行為を受け入れるのに十分な文学的素地がすでにイギリスに出来上がっていたことに大きく起因している(3-15)。

イギリスにおいて18世紀は、読者層の階層に大きな変化が見られる。元来識字率や経済的要因などから読者層というのはごく限られたものにすぎなかったが、18世紀になりいわゆる中産階級、特に女性たちが読者層に加わることになる。彼らの存在、つまり彼らの嗜好や傾向がその時代の作品に大きな影響をもたらしたと考えられている

(Watt,47-18)。そしてその結果誕生したのがサミュエル・リチャードソン (Samuel Richardson) やダニエル・デフォー (Daniel Defoe) などによって描かれる社会から疎外された哀れな女性たちをヒロインにした小説である。ポリー・ベイカーはこのようなヒロインたちと共通する要素を持っているだけではなく、ヒロインたちには欠けていた聡明さも兼ね備えていたのである。

ポリー・ベイカーの人気は、本国イギリスだけに留まることはなかった。彼女はその後も他のヨーロッパ諸国に時代を超えてその姿を幾度も現すことになる。最も人気を博したのは、初出から20年余り経った1770年代のフランスにおいてであった。虐げられた一人の女性が普遍の自然の法や理性に訴えかけながら、専横的な禁止事項に果敢に挑むその姿勢は、やがて来るフランス革命に向けて備えるべき国民の精神と見事に合致したのである。その姿は、理神論を体現するミューズと呼ぶにふさわしいものであり、中産階級のプロパガンダとしての役割を十分に果たすものだったといえるだろう。「ポリー・ベイカーの弁論」、つまりポリー・ベイカーの発言内容に建国の父であるベンジャミン・フランクリンの啓蒙主義的な思想やジャーナリストとしての資質を見て取ることはやさしい。またフランクリンが得意としていたホークス (hoax) の流れを汲むこの記事、言い換えるならば作品に新聞の発行部数を第一に考え、読者を意識した新聞作りを心掛けた一流のビジネスマンあるいは一流のプリンターとしてのフランクリンの姿勢を見ることも可能である。

しかしながらここで注目したいのは、「ポリー・ベイカーの弁論」の記事掲載をめぐる様々な謎である。ここに二つの大きな謎がある。ひとつは、フランクリンが匿名でこの記事を発表していることであり、もうひとつは、この記事が植民地ではなく本国イギリスで初出されていることである。「ポリー・ベイカーの弁論」は植民地において神政政治の土台が揺るぎ始め、共和制へと歩み始めていた時期、その中心的な役割を果たすことになるフランクリンの政治的思想や立場を明らかにするのに絶好の記事であっただけでなく、本国イギリスでの読者の反響を考慮すれば購読者獲得にむ

けて自ら発行している新聞である『ペンシルヴァニア・ガゼット』(The Pennsylvania Gazette)に第一に掲載すべき記事であったはずである。彼が、自らの名前を伏せ、遠く離れた土地で「ポリー・ベイカーの弁論」を発表した理由は何であったのか。

本稿では、その理由を探ることによってフランクリンをはじめとする当時の知識人たちが抱えるジレンマ、さらには神政政治から共和制へと移行期に植民地が抱えていた問題を明らかにするとともに本国イギリスにおいて匿名で発表したことによってフランクリンが想像していた以上にポリー・ベイカーの影響力が大きくなったことについても触れることにする。

18世紀という時代は、ピューリタニズムや神政政治がその力を失い始めていたとはいえ、その影響力は根強く残っていたと考えられる。そこには、伝統的なピューリタニズムが根深く存在しており、私生児も私生児を出産した女性も肩身を狭くして生きてゆかざるを得ない現実が待ち受けていた。それは女性だけでなく男性も同様であった。植民地には、不義をはたらいたことによって産まれてきた子供の父親が明らかになれば同じように罰する法が存在していた。ピューリタニズムにおいては、婚姻つまり夫婦というものは、社会を構成する最も小さな単位として考えられており、ポリー・ベイカーのような女性の存在は、まさに彼らが描く伝統的な理想の社会と対立するものであったと考えられる。

まずフランクリン自身の結婚観や女性に対する見解について検証する必要があるだろう。フランクリンは「ポリー・ベイカーの弁論」を発表する2年前に「年増情婦の寓話」(“Old Mistresses Apologue”, 1745)を発表しており、その中で次のように述べている。

It is the Man and Woman united that make the compleat human Being. Separate, she wants his Force of Body and Strength of Reason; he, her Softness, Sensibility and acute Discernment. Together they are more

likely to succeed in the World. A single Man has not nearly the Value he would have in that State of Union. He is an incomplete Animal. He resembles the odd Half of a Pair of Scissars. If you get a prudent healthy Wife, your Industry in your Profession, with her good Economy, will be a Fortune sufficient. (Franklin, 302)

完全な人間を作るのは、いっしょになった男と女である。別々であれば、女性は男性の肉体の力と理性の力に欠け、男性は女性の柔かさ、感受性、するどい洞察力に欠ける。いっしょであれば、世の中で成功する可能性が増すのである。独身の男性には、結婚の状態のとき持っているであろうような価値がまるでない。その男は不完全な動物である。彼は、はさみの片ちんばの刃に似ている。貴君が、分別のある、健康な妻をめとり、仕事に精を出せば、彼女の儉約と相まって、十分な財産ができよう。

女性は結婚という形において男性にとっての経済的そして精神的協力者としての価値を発揮する。フランクリン自身の結婚自体が、まさに自らの「世の中で成功する可能性が増す」という結果を求めるためのものであり、結婚後妻の儉約という影の力を得ながら「十分な財産」を築くことを実践していたといえるだろう。元々フランクリンは、持参金つきの妻をめとろうと考えていたが、実際には、持参金つきの女性と結婚することはなかった。しかし、彼の妻となったデボラ・リード (Deborah Read) は、結婚4年後に父の遺産を受け取るようになったばかりではなく、フィラデルフィア (Philadelphia) 生まれであり、教会の会員であった彼女の存在は様々な人物と知り合う機会をフランクリンにもたらし、ペンシルヴェニア (Pennsylvania) で印刷業を興した彼にとっては持参金以上の価値があったはずである。つまり、

結婚とは男性にとって自らの経済的発展のためにこそ不可欠なものと言える。『貧しいリチャードの暦』 (*Poor Richard's Almanac*) の中でリチャード・サンダース (Richard Saunders)、つまり発行人であるフランクリン自身が語っているように「よい妻と健康こそが男性にとって最も重要な財産なのである」 (Franklin, 1237)。既述したように、夫婦という単位が社会を構成する最小単位であることを考慮すれば、結婚は男性のみならずひいては社会全体の経済的発展に不可欠なものとなすことが可能である。社会全体の幸福のためには、最小単位である結婚が重要視されるのは当然のことであり、フランクリンは若い女性たちに熱心に結婚を勧め、主婦の心得を伝授するのである。

Go constantly to Meeting—or Church—till you get a good Husband; then stay at home, and nurse the Children, and live like a Christian. Spend your spare Hours, in sober Whisk, Prayers, or learning to cypher. You must practise *Addition* to your Husband's Estate, by Industry and Frugality; *Subtraction* of all unnecessary Expences; *Multiplication* (I would gladly have taught you that myself, but you thought it was time enough, and wouldn't learn) he will soon make you a Mistress of it... that when I have again the Pleasure of seeing you, I may find you like my Grape Vine, surrounded with Clusters, plump, juicy, blushing, pretty little rogues, like their Mama. (Franklin, 479)

結婚したら、家にいて、子供を育て、キリスト教徒らしく暮らすこと。暇な時間は、真面目なホイスト遊びやお祈り、あるいは計算の勉強をすること。勤勉と節約で旦那さんの財産に足し算をして、不必要な出費は全部引き算し、掛け算は (私が自分で教えてあげなかったが、君

はもうたくさんと考えて、学ぼうとしなかったが）旦那さんがすぐに君にどんどん子供を産ませて、君はその名人になるだろう。（中略）つまり、また会うときには、君はぶどうの蔓みたいに、ママのようにころころして、きびきびした、赤いほっぺの、可愛い腕白たちの房に囲まれているところを見たいものだ。

上記は、フランクリンが1755年に遠縁の娘であるキャサリン・レイに宛てた書簡である。フランクリンは、妻になるキャサリンに儉約に努め、夫の財産を増やし、さらに子作りに励むよう助言している。「足し算」、「引き算」、「掛け算」といった算数の用語を使った表現は、結婚と経済の関連性を容易に我々に連想させる。またぶどうの房に例えられた子供たちは、まさに国家、社会の宝であり、豊かな国家に必須であることは言うまでもないだろう。

フランクリンが理想とするこのような儉約や子作りに励むことによって夫や国家の財産を増やすことに積極的に協力する女性たちは、結婚することなく私生児を生み自らの手で育て、啓蒙主義思想を謳うポリ・ベイカーと相反するものと考えられる。しかしながら果たしてフランクリンが作り上げたポリ・ベイカーという女性は彼の理想の女性像と反するのであるだろうか。もし相反するものであるとすれば、なぜ彼はポリ・ベイカーという女性を生み出し、彼女に語らせる必要があったのであろうか。

「ポリ・ベイカーの弁論」を詳しく検証してみることにする。先述したようにポリ・ベイカーは、私生児を産んだ事で五回目の起訴を受けていた。過去二回は罰金を支払い、さらに二回は罰金を支払うことができなかったため公開の罰を受けている。そして五回目、彼女は裁判所で雄弁に語るのである。

Abstracted from the Law, I cannot conceive (may it please your Honours) what the Nature of my Offence is. I have brought Five fine Children into the World, at the Risque of my Life:...

Can it be a Crime (in the Nature of Things I mean) to add to the Number of the King's Subjects, in a new Country that really wants People? I own I should think it rather a Praise worthy, than a Punishable Action. I have debauch'd no other Woman's Husband, nor inticed any innocent Youth: . . . But, can even this be Fault of mine? I appeal to your Honours. You are pleased to allow I don't want Sense; but I must be stupid to the last Degree, not to prefer the honourable State of Wedlock, to the Condition I have lived in. I always was, and still am, willing to enter into it; I doubt not my Behaving well in it, having all the Industry, Frugality, Fertility, and Skill in Economy, appertaining to a good Wife's Character. I defy any Person to say I ever Refused an Offer of that Sort. (Franklin, 306)

法を除けば、私はおそれながら、私の罪が何であるのかわかりません。私は命をかけて、五人のよい子供をこの世に産み落としました。（中略）真に人を必要とする、新しい国において、王の臣民を増やすことは、道理上、犯罪と申せましょうか。それは罰すべきというより、誉めるべき行為だと私は思うのでございます。他の女性の夫を誘惑したり、若者を誘ったわけではございません。（中略）しかし、いままで暮らしてきた状態よりも、結婚生活の名誉ある状態の方を好まないとは、だいたい頭がおかしいにちがいないとお考えでございましょう。私はそうした生活に入りたいといつも思っております。きっとそのような生活でうまくやっています。よき妻の性格にふさわしい、勤勉、儉約、多産、節約の手腕が具わって

いるのですから。私がその向きの申し込みを拒絶したことなど絶対にありません。

ポリー・ベイカーは、ピューリタニズムが恐れ、断罪する不義をはたらいて次から次へと子供を身ごもったわけではなく、彼女自身はいつもピューリタニズムが考える社会生活の基本である結婚という形式を望んでいたのである。「勤勉、儉約、多産、節約」という彼女の才能は、必ずや夫の財産、国家の幸福を増すことに結びつくものと考えられる。してみれば、彼女はフランクリンの考えていた理想の女性像と合致しているといえるのではないだろうか。そしてポリー・ベイカーはさらに持論を次のように展開する。

What must poor young Women do, whom Custom has forbid to solicit the Men, and who cannot force themselves upon Husbands, when the Laws take no Care to provide them any, and yet severely punish if they do their Duty without them? Yes, Gentleman, I venture to call it a Duty; 'tis the Duty of the first and great Command of Nature, and of Nature's God, *Increase and multiply*: A Duty, from the steady Performance of which nothing has ever been able to deter me; but for it's Sake, I have hazarded the Loss of the public Esteem, and frequently incurr'd public Disgrace and Punishment; and therefore ought, in my humble Opinion, instead of a Whipping, to have a Statue erected to my Memory. (Franklin, 308)

世のしきたりとして女としての性から殿方に求婚できず、押しかけ女房もかなわず、一方法は夫を世話してくれずにかえって夫なしに本分を果たしたりすると厳罰を加える、そんなときに哀れな若い女は何をすべきでございましょうか。その本

分と申しますのは、自然と自然の神の第一のそして最大の掟、つまり「産めよ、殖やせよ」でございます。私がその本分を遂行することを、何ものも妨げることができませんでしたが、そのために私は皆からの尊敬を失い、何度も人前で辱めと刑罰を受けてまいりました。ですから、卑見によれば、私は鞭など打たれる代わりに私を記念して像でも建ててもらわべきなのでございます。

ここに男性にとって、言い換えるならば結婚相手として理想とされる経済的かつ精神的協力者としての女性像をみることは難しいと思われる。ポリー・ベイカーは自らの論を正当化するためにピューリタン、つまり人間が築き上げた法と自然つまり神の法を天秤にかけてみせたのだ。「自然」(Nature)の掟に従って彼女は「私生児」(natural child)を産んだのである。皆自然、神に従わざるを得ないのであり、彼女はピューリタニズムのもつ二重構造を暴いたといえるだろう。これこそが彼女を理神論や中産階級層のミューズに押し上げた原動力である。トマス・ジェファースン(Thomas Jefferson)が起草した独立宣言にこの記事が影響をもたらした可能性については周知の通りであり(Cohen, 301-04)。このことは「ポリー・ベイカーの弁論」すなわちフランクリンの弁論がいかに世間に広まっていたか、そしていかに見事な論の展開となっているかということを証明している。さらにこれは共和国建国に向けて国民が共有すべき思想をも明らかにしているといえるだろう。

ポリー・ベイカーという女性は、ピューリタニズム的、伝統的女性像の資質を備えていながらも、今まで男性の協力者としてのみ存在価値が認められていた女性の立場に自ら進んでもっと光を当てさせようとするような聡明さや狡猾さまでも併せ持つ女性としてみなすことができるだろう。これこそが新しい国家、これからの建設される共和国が求める女性像なのである。そしてポリー・ベイカーがもつこれらの特徴は、彼女の存在がフィクションである以上、ポリー・ベイカーという女性を創造し、彼女に雄弁に語らせたフランクリン自

身の特徴ということになると考えられる。建国の父祖らしく当時としてはかなりラディカルな発想といえるかもしれないが、共和国への歩みを促進させようと考えていたフランクリンであれば当然の考えであったといえるだろう。

しかしながら、ポリー・ベーカーが語る男女平等の発想はフランクリン自身のこれまでの女性に関わる文書に書かれてあることとの矛盾や違和感を感じざるを得ないのである。先に述べたように、フランクリンは儉約に努める協力者としての女性を理想としており、また実の娘であるサリー（Sarah）にも息子のウィリアム（William）に施したような教育は一切受けさせてはいないのである。彼女は裁縫などを習っていただけで、読み、書き、算数はほとんど出来ず、結果は失敗に終わったもののフランクリンは彼女と名門の家の子弟との結婚、つまり自らが果たすことができなかった良家との結婚を画策している。フランクリンにとって結婚とは、あくまでも世の中で成功するための手段でしかないのである。また晩年フランクリンは「左手からの嘆願」（“A Petition of the Left Hand”, 1785）の中で両親が双子の姉妹を差別することについて書いている。一見すると二人の姉妹に平等に教育を施すことを勧める、広く教育を勧めるための文書のように見て取れるかもしれないが、左手である妹が非難している右手である姉だけが受けている教育というのは、絵、音楽、裁縫等のお稽古事なのである。これは、フランクリンが「ペンシルヴァニアにおける青年の教育に関する提案」（“Proposals Relating to the Education of Youth in Pennsylvania”, 1749）のなかで推進しようとした教育と全く異なるものであり、そもそもこの提案の中に女性は想定されていないのである。ここにこそフランクリンが抱えるジレンマが存在していたといえるのではないだろうか。

ホークスという物語形式が宗教的あるいは政治的不正を暴く性質をもっていたり、また少なからず自伝的な要素を持つものであるという点を考慮すれば、Hallが指摘しているように、私生児を産んだかどで起訴され、弁明しているポリー・ベーカーは、同じように私生児ウィリアムの父である

フランクリン自身としてみなすことは可能であり正しいであろう。また「ポリー・ベーカーの弁論」を発表して自らが不利になるようなゴシップが世間に広まることを匿名にすることで避けたという見解も射ている。しかしながらフランクリンが、「ポリー・ベーカーの弁論」を本国イギリスにおいてしかも匿名で発表した理由は、前述したようにそれが自らの抱えるジレンマを解消するための唯一の方法だったからではないだろうか。共和国建国に向けて女性の知識の向上や男女平等という価値観は欠くことができない。その一方でフランクリンは、他の男性たちと同じように従来の伝統的な女性像や家父長制を生涯追求め続けていた、あるいは捨て去ることができなかったと考えられる。ポリー・ベーカーという仮面をかぶることによってのみなんとかその問題を超克していたのではないだろうか。すでに16歳の時点でフランクリンは、未亡人無言善女（Silence Dogood）という女性のペンネームで兄が発行する新聞に連載記事を書いている。この記事はイギリスにおいてジョセフ・アディソン（Joseph Addison）とリチャード・スティール（Richard Steele）両氏が創刊した『スペクテイター』（*Spectator*）の影響を強く受けたものであるといわれており、非常にウィットに富んだ記事に仕上がっている。そもそもアディソンやスティール自身、虐げられた人間についての記事を多く書いており、彼は当時から女性の名前を利用すること、つまりペンネームとすることの利点を心得ていたと思われる。利点とは、いうまでもなく購読者あるいは読者の反応に関わることである。

そして理由はそれだけにとどまらない。本国イギリスで最初に発表し、その後植民地で発表するという逆輸入という形式を取ったのは、本国イギリスからの独立を目指し共和国建国にむけて歩んでいた植民地を宣伝するという当時の知識人たちが担っていた重要な役割を果たすことができるだけでなく、本国イギリスでの読者の大きな反響という裏づけを得て自信を持って新大陸において発表できるからである。当時本国において反響が大きければ、当然その記事は太平洋を渡って植民地へ至ることになるのが常であった。印刷業者であ

るフランクリンは、この事実をよく踏まえていたのであり、それを実践しただけなのである。もっともこの記事を新大陸において真っ先に発表したのは『ボストン・ウィークリー・ポストボーイ』(*The Boston Weekly Post-Boy*)であり、ここでもフランクリンは自らこの記事に関わることは一切なかった。

フランクリンのこの徹底した姿勢、つまり自らの姿を隠してポリー・ベイカーを自らの手から手放してしまったからこそ彼女は、一層雄弁に語り、ヨーロッパ各地において知識人たちからこぞって時代の代弁者として選ばれることになったのではないだろうか。彼女の背後に私生児の父であり、その事実には翻弄されたフランクリンが見え隠れしていればここまで彼女が人気を博すことはなかったと思われる。本国イギリスの人々、特に女性読者が彼女の快活で聡明な姿に感動し、新大陸において自由に発言する自らの姿を彼女に重ねることはなかったのだろうか。彼女が本当に実在するの可否かということが問題として取り上げられることがあったのだろうか。してみれば、フランクリンが匿名で遠く離れた本国でこの記事を出版したことは、大成功だったといえるだろう。しかもこれは彼が予想していた以上の成功であったはずである。

フランクリンの「ポリー・ベイカーの弁論」をめぐる謎は、フランクリン自身が抱えるジレンマの結果であり、神政政治から共和制へと徐々に移行していた過渡期の植民地が抱えるジレンマをも体现しているといえるだろう。フランクリンの手元を離れたポリー・ベイカーは、フランクリンや植民地の抱えるジレンマという足かせを最小限に抑えることによって、自由に堂々と語ることができたのである。ポリー・ベイカーは、まさに植民地のあるいは植民地の人々が目指すべき思想の代弁者であり、ヨーロッパでの自信を獲得した彼女は海を渡り植民地でもこれから共有すべき思想を改めて市民に認識させたのである。この二重の功績がフランクリンの意図した結果であったかどうかという点については不確かであったとしても、彼がポリー・ベイカーに代表されるこれからの理想の女性像をプレゼンテーションした功績はきわめて大きいと考えられる。

引用・参考文献

- Brands, H.W. *The First American: The Life and Times of Benjamin Franklin*. New York: Doubleday, 2000.
- Campbell, James. *Recovering Benjamin Franklin*. Illinois: Open Court, 1999.
- Cohen, I.Bernard. *Science and the Founding Fathers: Science in the Political Thought of Jefferson, Franklin, Adams, and Madison*. (New York: W.W.Norton and Company, 1995), 301-04.
- Doren, Carl Van. *Benjamin Franklin*. New York: Penguin Books, 1991.
- Franklin, Benjamin. *Benjamin Franklin: Writings*. (New York: The Library of America, 1987) 日本語訳は、『アメリカ古典文庫 I フランクリン』(東京、研究社、1975年)を参考にさせていただいた。
- Jefferson, Thomas. *Thomas Jefferson: Writings*. New York: The Library of America, 1984.
- Hall, David D. *Cultures of Print: Essays in the History of the Book*. Amherst: University of Massachusetts Press, 1996.
- Hall, Max. *Benjamin Franklin and Polly Baker: The History of a Literary Deception*. (Pittsburgh: University of Pittsburgh Press, 1990)
- Oberg, Barbara B., and Stout, Harry S. ed. *Benjamin Franklin, Jonathan Edwards, and the Representation of American Culture*. New York: Oxford University of Press, 1993.
- Smith, Jeffery A. *Printers and Press Freedom: The Ideology of Early American Journalism*. New York: Oxford University Press, 1988.
- … *Franklin and Bache: Envisioning the Enlightened Republic*. New York: Oxford University Press, 1990.
- Tise, Larry. *Benjamin Franklin and Women*.

- Pennsylvania: The Pennsylvania State University Press, 2000.
- Watt, Ian. *The Rise of the Novel*. (Chatto & Windus, 1957) 藤田永祐訳『小説の勃興』(東京、南雲堂、1999年)
- Worth, Lawrence C. *The Colonial Printer*. New York: Dover Publications, Inc., 1965.
- 大西直樹 『ニューイングランドの宗教と社会』
東京 彩流社 1997年